資料３

令和5年度第4回市民活動推進委員会全体協議まとめ

感じている課題	
	若い世代・新しい人が入ってこない
	広報の仕方
	学ぶ意欲があっても、自分たちで学ぶ場を作るという流れに繋がらない
	活動を立ち上げた後、同じ認識を持った人があまり加入しない
	忙しい人が増え、市民活動に時間を割くことが難しい社会になっている
世代の幅を広げるために実施（意識）していること	
	世代に合わせたイベント内容を実施
	活動をいかに知ってもらうかの広報
	みんなが協力できる、自分の仕事に魅力が持てるように
	活躍しそうな人材を団体にいかに引き込むか
	名誉的・金銭的にやる気を起こす
	やりたい分野・得意分野に応じて参加できる雰囲気づくり
	発言したくなるように日頃から様々な声掛け
	お試しの機会を設ける
	スタッフの活動を一定期間見てもらい、雰囲気を感じてもらう
	全てを丸投げするのではなく、みんなで併走する
	自主性を重んじながら、その人の得意を見つけてもらい、そこで活きるような自分を発見してもらう時間を設ける
	スタッフの適材適所を大切にしており、その結果、スタッフ自身が参加しやすい環境に繋がっている
	団体のために無理してやるのではなく、その世代に合わせて、やれるところをやるということが、どんな世代のスタッフでも参加しやすい組織として運営することが出来ている
	敷居を下げて、いろんな人に入ってもらいやすいような環境をつくる
	若手の人に積極的に声をかけ、介入しながら若手の人に任せる
	定期的に達成感のシェアを図る
	一緒に進めていく（併走していく）中で、ある程度したら、一歩引いてひとり立ちできるように流れを作る
考えていること・過去の経験から	
	いかにスタッフとしてやってもらうか、その人の心の内だけでは、動かないということをいかにみんなが理解するか
	いろんな人が話せる雰囲気を大切にしないと、辞めていってしまうような傾向がある
	参加者が運営側にある程度スライドしていかないと団体としては維持出来ない
	どのような活動であるにしろ、持続していくためには新しい人が入ってこないといけない
	どうやって新しい人に興味を持って参加してもらうかが世代の幅を広げるということとニアリーイコールではないか
	新しい人にすぐ仕事を任せようとしてしまうが、そうすると「出来ない」ということで辞めていかれる方がいた
	参加が少ない世代を増やしたいと考えたら、ターゲットを絞ることが大切
	今までのあり方を押し付けると、新しい人は離れてしまいやすい
	新しい世代の新しい考え方をある程度認めながら、変化をしていくことが必要
市民活動の幅広さ・世代について	
	市民団体と言っても枠組みが幅広い
	世代間もあまり関係無い
	市民活動には様々な業種がある
	活動によって年齢や属性などのセグメントが変わってくる
	ターゲットやセグメントの整理が必要
	対象となる人口が変わってくる
	人生が長くなったことを考慮して、対象者に声掛けしていくことが必要
	世代を超える必要は無いが、世代が偏っていることは否定できない
	若い世代の方々と引退された方々では、市民活動に参加する意図や目的はかなり大きく違う
	すべての市民活動が、必ずしも世代交代をしていくことを望んでいるわけでもない